

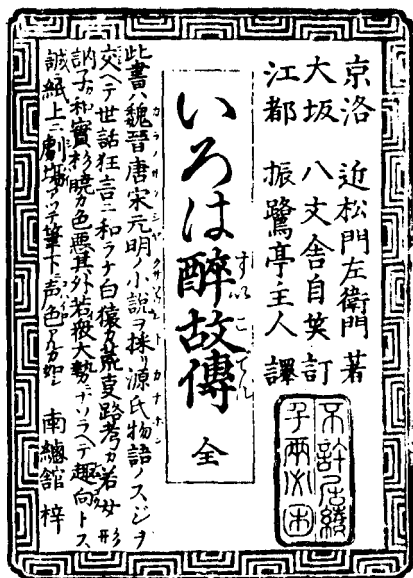
中本『いろは醉故伝』(振鷺亭主人作)

— 解題と翻刻 —

横山邦治

(書誌)

中本一冊、十二・七纏×十八・三纏、表紙縹色、題簽表紙左肩二・五纏×十二纏子持ち匡郭「いろは醉故伝 全」、内題「教訓いろは醉故伝」、本文匡郭單辺無界十一纏×十五纏、本文九行三十字内外、板心なし、八文舎自笑なる序文二丁、自叙二丁半、巻頭繡像三丁、目錄一丁半、本文四十五丁、跋文半丁、巻末広告一丁半、挿絵なし。巻末刊記なけれど、見返しに「南總館梓」と見え、巻末に南總館の出板目録あり、自笑なる



(見返し)

利兵衛の板であるが、底本とせるは後刷本かも知れない。初刷本と断定できるもの未見。

(解題)

読本における中本ものの存在については、すでに中村幸彦先生に卓抜な御論があり(注一)、その書目年表については私に提示したものがあつた(注二)。「高尾船字文」五曲亭馬琴寛政八年刊が檜谷昭彦氏によって翻刻紹介されている(注三)ほか、二三紹介されるに止まっている。その大半は、世人の興おもむかざるままに放置せられているといつてよい。ここに翻刻紹介する振鷺亭主人の「いろは酔故伝」は、曲亭馬琴の読本における処女作とされている「高尾船字文」を生み出す役割を果していること、その体裁がほぼ同一であり、その内容が水滸のもじりという点で一致しているなどによって、まずは文学史的事実と認めてよいものである。当然、読本としては体裁上からも内容上からも未成熟とされる「高尾船字文」よりも一層未完成なものではあるが、それだけに中本としての古体を存しており、洒落本との脈絡を内容的には考えさせられる一面をも有しているごとくである。事実「日本小説書目年表」では洒落本の項に

○教訓いろは酔故伝 一 振鷺亭主人 寛政六年と記載されている。

さらにこの「いろは酔故伝」は、後年人情本の代表的作者となつた爲

仮托の人物の序に「寛政甲寅春正月」とあるので、寛政六年刊の上總屋中本『いろは酔故伝』(振鷺亭主人作)

永春水の手によって、彼がいまだ駆出し時代の文政三年、『堤下市隠三鷺補正』という署名のもとに「建久水滄伝」と改題再版されているという(注四)。

これらを考えあわせると、この「いろは醉故伝」の存在は、中本発生時点における洒落本との関連、さらに文化年間に一時姿を消していた中本が文政初頭に人情本の先蹤的役割を荷って再出現してきたものとの関連など、洒落本・中本・人情本三者の複雑なかかわり合いについて思いをひそめる必要性を要求する作品といえるであろう。

振鷺亭主人が中本ものの多作者であったことを再認識しながら、ここに翻刻するゆえんである。

(本学教授)

注一・中村幸彦先生「人情本と中本型読本」(近世小説史の研究・所収)参照。

注二・拙稿「中本もの書目年表稿」(近世文芸・17号)参照。

注三・檜谷昭彦「高尾船字文―解題・翻刻」(近世小説―研究と資料―所収)参照。

注四・中村幸彦先生「模索期の春水」(国語国文・第17巻第9号)参照。

(凡例)

一、翻刻に当り左の方針をとった。

1、できるだけ私意を加えず底本に忠実たらんと努めた、明らかに誤刻と思われるもののみ右傍に「」の注記を加えた。

2、漢字、かな文字は、可能なかぎり現行のものとした。

3、片かな文字で表記あるは、できるだけそのまま存した。

4、振かなも底本のとおりとした。

5、二字の合字のうち方はそのまま残したが、こと・こゑ・こへなどの合字は二字にした。

6、各丁毎に「印を付し、4*のごとくに注した。

8、巻頭・序・縮像など必要あるは図版で示し、翻字は畧した。一、底本は国会図書館蔵本に拠った。記して謝意を表す。なおこの底本には序文部分に一丁分重複があるが畧した。

いろは醉故傳序

謝道人曰子身一落情障只有兩條
生路一曰遂其欲爲之念一曰激其
欲爲而不能即遂之念遂其欲爲之
念則此外并無他想精神才力反有
著落功名事業反有根據矣云云我
父祖自笑嘗讀近松氏之志其所著
雖出遊戲凡主鑒戒今也振鷺先生

(1オ)

降卓絶之才以外俗情之趣頃劇本
雖充棟汗牛豈亦有如此賞奇者歟
噫先生江左風流士彼欲爲而不能
即遂者則必思有以遂之矣庶幾念
其念易賢云斯編益興用放情之激
法則先生大意盡是

(1ウ)

攝陽

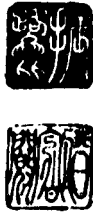
八文舎自笑題

寛政甲寅春正月



自叙
 施耐庵が水滸傳に比し由良殿の空酔に效ひて醉故傳をつくるされバ虚か
 ら出た實にて全部末を遂たり蓋郭氏韓寿が亡滅は所謂我朝のおはん長右
 衛門是なり女也不爽士二其行也との教の詩を國字に和らけ且阻春白雪
 を以て世俗に隲さまく欲す抑西施羅山の賣薪の娘高雄養輪の芋賣の娘と
 かや瞋目鼻だち如何なる道具ぞや小町が面とて硝子屋の細工にてもなく
 累が面とて出来合にてもあるべからず玄宗貴妃が柳腰の滔なるを寵し
 宣王無鹽君が屁腰の臭なるを愛すハかくべつの物好なり潘安人が好男
 張孟陽が醜男古鉄沽に見せバ直段の高下いかん彼洛神の雪女巫山の雲女
 是化物なり婦人都而紅粉を剥バ正にこれ蠻瓜の皮天性鄭國の女さうべ
 つ何怜して我日本越後の女の如く味噌こし變じて玉の輿となるもあり歎
 ずべし美人終にお花荒神松糊賣老婆とならん事を嘻卓王孫が娘淨留利の
 声に慕て司相如がにてもあるべからず玄宗貴妃が柳腰の滔なるを寵し
 ……一丁分同文混入……宋玉在中将女態艶冶郎浮気も
 の、模範となる戒むべし如斯人

振驚亭主人醉中誌



5+

中本『いろは醉故伝』（振驚亭主人作）



(6才)

(5ウ)

いろは醉故傳目錄

第一回

呉服用太夫が智第六天魔王を走らす

第二回

俱伽迦羅龍紋九郎橋の上に涼む

第三回

和尙逆様に尺角の幟杭を抜く

第四回

和尙大に木曾の大竹林を騒かす

第五回

深太郎大に酒に酔ふて仁王嚙を打

第六回

宋次郎大雪の夜野中の古社

第七回

藝者おしやう片岡の山越にて狼を打

第八回

玉子婆甲州街道にて肉饅頭を賣

第九回

孫勝法印大峯山上にて幻術を使ふ

右以上九篇

振鷲亭主人戯作

教訓いろは醉故傳

呉服用太夫が智第六天魔王を走らす

建久のむかし鎌倉繁栄の時代北條家の推挙により権門専なる岩永左衛門
隠居して高俵入道といふ嫡男武太郎殿と申ハ生得至つておろかなる殿ぶ
りなりしが天然の縁とて嫁君おしやうの方ハ三十二相そなわりし今小町

中本『いろは醉故傳』(振鷲亭主人作)

とて御容儀坂東一の聞へ有殊に御発明にて十種香哥かるた琴尺八絵かき
花むすび都て朝夕哥学に心をよせ給ひ御心ばへのやさしさ貞女の道ハさ
らなり十六の春御ゑんだん調ひて御夫婦中の睦じき何一ツ御ふそくなき
中におしやうの方御持病の御しやくつよく常もさし込給へハ絶入給
ふ事度々にて医療さまく手に手を盡せ共其驗なくお心おもく見へさせ給
ふ折から奥家老呉服用左衛門申上げるやう孫勝法印と申人相卜筮のあり
まさ諸病の加持をいたすにふしぎの奇特あるよし承れまいそぎ御きたう
有て然るべからんとその頃かまくらにて生神と尊ミしかの孫勝法印を招
待せられけるに法印ハおしやうの方の人相を熟々ミて暫く眼をとぢて観
念して居られけるが大に驚て申ハ尋常の病症にあらず第六天魔王の
魅入なりとて奥の間に檀をかざり廿四行の供物廿四の燈明十二本の幣
をたて四種の名香を柱秘文を唱へ一七日が間祈られける既に護おハ
て一封の御札を「恭敷おしやうのかたに戴せまいらせはこれ行法秘
密の御札なり御寝所の椽の下を二丈ばかり堀て此御札を納置給ふべしと
て法印ハ退出しけれハ早速用左衛門人夫に申付御寝所の下凡二丈あまり
も堀つらんと思ふ所に方一丈の堀もあるべき一ツ片の青石ありて闔のご
とく鉄の鎖をさしてあり用左衛門是をミて大に怪しミ鉄槌をもつてかの
鎖を打くだき闔を押ひらき人夫を入れて見するに一ツの石の櫃ありその
大さき凡二間余もあるべしその前に石碑ありなカバは土中に埋ぬ用左衛
門人夫に云付挑灯をとほさしめ碑の面を照らしみるに悉く篆字にてよむ
事あたハず又碑の裏を照らしみるに仮名の太文字ありいろはといふの四
字なり是則「色ハ理外の一挙にして家に不義もの頭ハるべき兆なり豈
因縁ならざらんや用左衛門ハ此三字を見ていよく怪しミ人夫をかけて
かの石櫃の蓋を推ひらかせて其中をみるに万丈の深さもあるんと覺て一
ツの穴あり穴の内忽大地も崩るゝばかりに響き左右の土中ごとく震
動す用左衛門ミなく驚きみる所に穴の内より雲の如くなる一道の黒氣
生じ直に半天に立のほりしが百余道の金の光となり四面八方に飛さりぬ

人夫大きに驚き我先にと土中を逃出あるひハ推し倒され或ハふみかへされあハて騒ぎて半死半生となり上下の男女すべて人心地なく大息つておそれ合へり¹¹

俱^{とも}徂^も羅^ろ龍^{りゆう}紋^{もん}九^く郎^{らう}橋^{はし}上^{の上}に涼^{すず}む

岩^{いわ}永^{なが}の二^に男^{おとこ}宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}と申^{まを}ハ兄^{あに}武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}とハ事^{こと}かわり鎌^{かま}倉^{くら}一^{いち}の美^ひ男^{おとこ}にてしかも今年^{ことし}十八^{じゅうはち}才^{さい}昼^{ひる}夜^よ学^{がく}問^{もん}にのミ心をゆだねられて下^{した}屋^や敷^{しき}の部^ぶ屋^や住^{すま}居^ぐなりしが兄^{あに}武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}の嫁^{よめ}をむかへられし祝^{いわい}儀^ぎとして上^{うへ}屋^や鋪^ぽへ参^{まゐ}られけるに奥^{おく}女^{おんな}中^{ちゆう}共^{きやう}隅^ぐ々^々にて叫^{こゑ}合^あふハおしよさまの御^ごきりやうにてお館^{やかた}のやうなる殿^{でん}御^ごを持^も給^{たま}ふハお月^{つき}さまと泥^{ちひ}亀^{かめ}なり弟^{てい}君^{きみ}のやうなる美^{うつく}き殿^{でん}御^ごならハ誠^{まこと}に一^{いち}ッ対^{たい}のお雛^{ひな}さまなりむかしから謠^{うた}にも駿^{しゅん}馬^ば却^{かへ}て痴^ち漢^{かん}を駄^だて走^{はし}り美^{うつく}妻^{さい}常^{つね}に拙^{つたな}夫^ふを伴^{たづな}ふて眠^ねるといふ事^{こと}あり儘^{まま}ならぬが世^よの中^{なかつ}じやとてひそかに是^{これ}を笑^{わら}ふ兄^{あに}武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}にハ心に自^{おのれ}慢^{まん}の奥^{おく}方^{かた}おしよの方^{かた}を引^ひ合^あさる三人^{さんにん}座^ざをつらねて宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}にハるんぎんに阿^あ嫂^{しやう}おしやう²の方^{かた}に向^{むか}ひ祝^{いわい}儀^ぎを演^{えん}らるれども至^{いた}つて物^{もの}堅^{かた}き生^なれゆへ額^{ひたい}をも得^えあぜず慎^{つしん}でゐらるおしよの方^{かた}にも此^{こゝ}日^ひうるくしさにゑしやくのミにて何^{なん}の風^{ふう}情^{じやう}もなく宋^{そう}次^じ郎^{らう}立^た帰^{かへ}らるゝ時^{とき}おしよの方^{かた}おくり出^でられ不^ふ斗^と宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}の後^{のち}姿^{すがた}を見^みられけるに兄^{あに}君^{きみ}にハ勝^{まさ}給^{たま}ふ人^{ひと}体^{てい}かなと思^{おも}へられけれバ貞^{てい}心^{しん}遠^{えん}慮^{りょ}あつて是^{こゝ}より宋^{そう}次^じ郎^{らう}参^{まゐ}らるゝとそ^{その}の儘^{まま}座^ざを立て奥^{おく}へ這^{はい}入^{いれ}らるゝゆへ宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}にハ半^{はん}年^{ねん}あまりの間^{かん}おしやうの方^{かた}の器^き量^{りやう}しかと見^み留^{とど}められたる事^{こと}なく只^{ただ}嫂^{しやう}ハあいそなき人^{ひと}なりと思^{おも}ハれけるある日^ひ例^{れい}の通^{とほ}りおしよの方^{かた}座^ざを立てはづさるゝ時に蹴^けかへす棲^すのちらと足の爪^{つめ}先^{さき}目^めうつりけるにその艶^{つや}やかさ得^えならぬにこそ是^{こゝ}より宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}にハ嗜^{たしな}まれ用^{よう}事^じの外^{がわ}且^{かつ}て行^いく事^{こと}なく行^いても長^{なが}居^ぐせす遠^{とほ}くハ十^{じゅう}万^{まん}八^{はち}千^{せん}里^り近^きくハ眼^{がん}前^{ぜん}いつからとなく¹²どちからとなく何^{なん}となく打^{うち}とけるに随^{まづ}ひ見^みもし見^みらるゝ月^{つき}と花^{はな}ちつと見^みかわす目^めの内^{うち}に嫂^{しやう}我^{われ}に心^{こゝろ}あり氣^きの体^{てい}誠^{まこと}や女^{おんな}の心^{こゝろ}といふものハ恐^{おそ}ろしきものなりと宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}にハ恐^{おそ}れ窺^{のぞ}ふに又^{また}ある時^{とき}ハよき折^{せり}からなるに顔^{かほ}をむけて露^{つゆ}心^{しん}なき体^{てい}扱^あハ我^{われ}の心^{こゝろ}の迷^{まよ}ひより心^{こゝろ}内^{うち}にあれば色^{いろ}外^{がわ}に顯^{あら}はなれとて大^{だい}に挨^あ拶^{さつ}からを心^{こゝろ}遣^{つか}ひせらるゝにお

しよの方^{かた}ハまた武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}の前^{まへ}にてもよ顔^{かほ}に笑^{わら}ふくみて詞^{ことば}さへぐくし¹³く咄^{はなし}しかけるれども宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}にハとりあへず武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}と学^{がく}問^{もん}武^ぶ芸^{げい}の物^{もの}語^ごの外^{がわ}決^{けつ}してたハれたる事^{こと}なし斯^{かく}て雪^{ゆき}のふりける日^ひ宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}来^きかゝり武^ぶ太^た郎^{らう}殿^{でん}の留^{とど}主^{しゅ}と聞^{きこ}すぐさま帰^{かへ}らんとせらるゝを^をおしよの方^{かた}ひらに引^ひとめてうす茶^{ちや}をたてゝ出^でさる此^{こゝ}時^{とき}あたりにも人^{ひと}もなけれバ宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}顔^{かほ}色^{しよく}を正^{ただ}しく¹⁴して居^ゐらるゝにおしよの方^{かた}しきりに宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}のかほを睨^{にら}付^{つけ}られけれバ宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}心^{こゝろ}の中^{なかつ}に安^{やす}からずこそ思^{おも}ひて立^た帰^{かへ}らんけしきなれハ又^{また}おしよの方^{かた}面^{おもて}に溢^{あふ}かゝる笑^{わら}をふくんで¹⁵是^{こゝ}ハ珍^{めづ}しき口^{くち}とり也^{なり}一^{いち}ッ御^ごとりなされませしかしきゝのかたがお好^{この}のやうに見^みへますると何^{なん}とやらほのめきたる詞^{ことば}のはし宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}ハ吃^{きつ}として御^ご酒^{しゆ}ハ下^{した}さらずとのミいわるおしよの方^{かた}ハ爐^ろの灰^{はい}を搔^かならしながらいくつに御^ごなりなさるへと聞^{きこ}も小^こ声^{こゝろ}なり宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}こゑ大^{だい}きく十八^{じゅうはち}才^{さい}なりといふにおしよの方^{かた}口^{くち}もりて下^{した}やしきにばかり御^ご出^でなされてハ何^{なん}もおもしろひ事^{こと}もござりますまひとひたすらもの思^{おも}ひを¹⁶含^{くみ}て媚^{こゝろ}にけり此^{こゝ}時^{とき}宋^{そう}次^じ郎^{らう}殿^{でん}ハ只^{ただ}俯^{うつむ}て一言^{いちごん}半^{はん}句^くも詞^{ことば}なかりしが心^{こゝろ}よからぬ体^{てい}にて暇^{ひま}申^{まを}て下^{した}やしきへ帰^{かへ}ける其^{その}間^{かん}三^{さん}年^{ねん}春^{はる}秋^{あき}ハ只^{ただ}これ¹⁷胡^こ蝶^{てふ}の夢^{ゆめ}心^{こゝろ}を蘭^{らん}室^{しつ}の花^{はな}に染^それバ秋^{あき}のつゆしバノもろきものぞかし爰^{こゝ}に名^なうての亭^{てい}者^{しや}あり腕^{うで}よりせなかへかけて俱^く徂^も羅^ろ龍^{りゆう}の彫^{がう}ものしたる故^{ゆゑ}其^{その}名^なを俱^く徂^も羅^ろ龍^{りゆう}を捨^する事^{こと}湯^ゆ水^{すい}のやうに思^{おも}ふ氣^き性^{じやう}なりしかバよき株^{かき}敷^{しき}を投^なげつて今^{いま}ハ梅^{うめ}沢^{さき}の押^{おし}上^{あが}にて植^{うゑ}木^きやを渡^{わた}世^よにくらす時^{とき}しも夏^{なつ}の夜^よの暑^{あつ}さ凌^あかね堤^つの河^か端^{はた}に涼^{すず}臺^{だい}置^おて獨^{ひとり}寝^ね軋^{げん}び居^ゐたるが芦^{あし}の葉^はをふく風^{ふう}涼^{すず}しくあまりの心^{こゝろ}もちよき夜^よの更^{さら}るをも知らずやゝ眼^{がん}氣^ききざしたり時^{とき}に向^{むか}ふの土^{つち}橋^{はし}の下^{した}の芦^{あし}の繁^{さか}りたる中^{なかつ}をかき分^わて壹^{いち}人^{にん}の男^{おとこ}樋^ひの口^{くち}を傳^{つた}ひて橋^{はし}の上^{うへ}にのぼり往^い来^{らい}を窺^{のぞ}ひ見る時^{とき}に月^{つき}ハ雲^{うみ}がくれしてくらし紋^{もん}九^く郎^{らう}此^{こゝ}体^{てい}をミて咳^{せき}拂^{はら}を¹⁸しけれバかの男^{おとこ}ハあわてふためきて又^{また}芦^{あし}の中^{なかつ}へかくれたり紋^{もん}九^く郎^{らう}心^{こゝろ}に扱^あハ追^お剝^はなるへし見^み届^{とど}て引^ひとらまへてくれんものと思^{おも}ひ團^{だん}扇^{せん}づかひをやめて蚊^{あひ}をも追^おハず密^{ひそ}かに窺^{のぞ}ひる此^{こゝ}時^{とき}月^{つき}ハ森^{もり}を出^ではづれて昼^{ひる}のごとし霞^{よすみ}雀^{さく}しきりに

啼て夜ハしん／＼と更わたる時に以前の男又繁ミの中より出て橋のうへに上るを見れば顔ハくつきりとして内裏びなのごとく月代のびてびろうとのやうにて黒ちりめんの紋付に光輝く大小をさしたる其人から艶しくして気高きがあなたこなたを見廻して又声の中へ這入けるが壹人の女の手をとりて這上る紋九郎息をこらして是をみるに顔ハ弁才天女とも覺しくて館もやうの紫ちりめんに金糸の縫紋金網のかゝえ帶うづ高く目ハ泣はれてつや／＼しく黒髪に置く夜露たよ／＼しく二人橋の上にてひと抱き合て暫く泣居たるが女因果と思つておくれなされへといふ聲ばかり聞へて口に袂を當て泣入けるを男ハ女を仰向にして上にまたがり刀をぬひて既に女の吭を突通し其身も腹切らん覺悟と見へたるが氣おくれのやうす見るより紋九郎むつくとはねおきて橋のうへに欠上り二人を引だかへて刀をもぎ取るに二人ハ死なして／＼としがミ付くを紋九郎やう／＼引はなし事とすべによつてハ留もいたしやすめへが是にハ定めて深きひ沢あい一通りお聞かせなせいと聞かれて男ハ涙をとどめ何をかくさん名ハ申されぬが某事ハさる武家の二男にて宋次郎と申ものなり是なるハ我爲にハ嫂なるがふとしたる某が惡念より三日以前にやしきを欠落いたし寄る方もなく覺悟きハめ候なり何とぞ見のがして死なして下されと云紋九郎是を聞ておめへさん人のい／＼ふよごせへやすハおふたりのお命ハ私か囉ひやしたと手を取て我家へ俱ひぬ二人ハ思ひかけなく一夜を明し見しにおくそこもなき紋九郎が真切に中々心置もなく思ハず爰に百日あまり閉ハれる然るに宋次郎ふと冒風の心地より勞疫の傷寒と成大人參三分ツ、毎日の人參代に大小ハいふにおよはずおしようハ櫛かんざしを賣しろなし夜の目も合ハぬ昼夜のかんがく此うへ金のくめにハ紋九郎が力づくにも及ばずせん詰つた折からに大磯の亡ハや舞霍やの傳三といふもの妙見まいるの道すがら植木見に立よりしがおしようを見て大きにほり出し物と悦び紋九郎に相談に及ぶ紋九郎ハ此事おしようへも語らざりしがおしやうハ立聞して是さいわひ見殺にせんよ

りハと宋次郎へ打明て三年百兩に證文を極め薬をあたゝめ宋次郎が枕元近くよりそんならもふわたしハ参りますどうぞ御本服遊ませへといふた斗是が死別れでハ有まひかと胸つぶらしく取殘し紋九郎にハこま／＼と札を云てあとをたのミ置駕に乗つて別れぬ夫よりおしようハ舞霍屋の嶋浪とて全盛大磯にならぶ方なく其後宋次郎をくるわの去る裏店にかくまひ置て朝夕のたべものまで筆につきせぬその真実遊里の事ハいふべからず

ろ和尚逆に尺角の轎杭を引拔

頃ハ三月の天氣花見ゆさんに打群て秋葉の境内に所々の石持に渡つて歩行く指折の若もの大勢集りて見物おしも分られずいづれも五拾五貫六十貫二ツゆすつてかつくもあり三べん廻つて投るも有爰に奉納石と名付凡百貫めもあらんと思ふ大石あり皆々第一番の名を彫付んといさみす／＼で擔んとすれども腰を切りかねやう／＼一尺寸地をはなる／＼を手がらとし手を組てむなしく見物する斗、也時に梅沢の紋九郎赤裸になつておどり出たり男ハ力つぱにして大きくからだハきめごまかにして骨組色白の仁王のごとくかのくりから龍のほりもの藍にて染ぬきたるやうなるがめくら縞の腹かけに白ちりめんの褌一ツにて手はやくあら縄甘すじばかり両手にもつてかの大石をうんといつて腰をそらし一ゆすりゆすつてかつき上腰をのしてぐつとさし上暫くたもつてゐたりしが大地へどうど投捨しかバ見物とよめき渡つてしバしハ鳴もやまずかの大石を秤に懸たれバてうど百貫目ありすでに奉納御宝前百貫目梅沢俣廻羅龍紋九郎と名をかの大石にほり付んとする所に傍に一人のはつち坊主あつて此石沢庵のおもし位のものなりと大にせ／＼ら笑ふ紋九郎是を聞て大にせきこミ此坊主め大般若の御経でハあるまいしうぬ口かるに百貫をかつがバぢうハリと子分に力なつて親分と崇め奉らんかの坊主ハ年よつても深太郎なり辻片腕をめき鉢巻をしてよろめき出るミな是をみるに面ハ悪とうにして色くろく酒にゑひたると見へ鳶色に成拔上たる大額胸背中にろの字

を彫るゆへ渾名を和尙といふものなるがたはらなる五反かけの轆竿をかる／＼と横に倒してかの大石をちうはらに抱か／＼へて縄にて結び、轆竿に引かけて、誠に百貫目有るか秤にかけてふつて見んと肩に引かきて秤の分銅のごとくかの大石をぶら／＼廻しけれハ諸見物はを見て一度にどつとほむるこゑ角力場のごとく此時若ひものども肩に懸たる手ぬぐひをとつてこしをかぎめる和尙深太郎とちかづきになり水のをミシバらく休める所に、料理茶や昔屋の下女あへてふためきて走り来、只今わつちらが所に大けんくわありしづめて給へと聞もあへず紋九郎裾はせ折てはしり行ろ和尙是を聞ておもしろき事に思ひ尺角の轆杭の本を引いだきうんといふて一、扨ゆすりけれハ斯地の中六尺斗堅くほりいたる轆杭大地を裂て引ぬきけり爰に一個の大尽大磯の遊君嶋浪にふかくはまりけふ秋葉参りながら昔屋へ速来る嶋浪ハけふ蜜に昔屋にて出逢ハんと宋次郎に文のしらせ有て宋次郎爰に忍び来たりて出逢ふ所をかの大尽兼て此事を知り野間大勢つれ来り昔屋の座敷にて宋次郎をさんぐに打擲すかゝる処に和尙一ッさんに飛来りかの大尽を禦へほうり込ミ尺角の轆杭にてのし、掛りて打けれハ忽氣絶しけり是をミると若ひものどもいつの間に無くなり只紋九郎と和尙と二人のミ残れり一体此ろ和尙深九郎酒吞時ハ雷のごとく酒吞まぬ時ハ猫のやうなるが此時酔さめて大に後悔し覚悟をきかめて紋九郎に此世のいとまごひをしけれハ紋九郎宋次郎に和尙とちかづきにしていふ宋次郎さんも嶋浪さん身引受て世話せねばならぬ義理合その事からおこつて親分の災難おれがかぶらねバ男が立ずとて和尙宋次郎を逃させてその身ハ土の牢へ入られける嶋浪ハ其のバにて云ひたひ事の数／＼も人目の関に隔られ生別れにもならふかと宋次郎が顔を見て涙をふくむ目の内に念を残して引立られすげなくくるわへ帰しがある夜大門を紛出んとして見付られ亭主伝三が大はら立何やら事の誤有て超太といふものにその身をあづけられぬ

和尙大に木曾の大竹林をさハがす

扱嶋浪ハ三ヶ谷の超太か方にかゝり居て宋次郎が行衛をしたひ正法寺のびしや門へ願をかけての塩もの断里の全盛引かへて三疊敷のあばらやに詠るものハタがほのはかなき我身につまされて瓦煙にて思ひ出すありしまがきの吸付たばこ口舌のはてはかんしやくでふたれたりふまれたりやつぱりそれか嬉しさにしりつゝ腹を立たせたも今で思へハ後悔などひとりじれてハ恋作の頃しも夏の夕つかた浅茅か原の松風總泉寺の鐘のこゑ玉姫いなり鈴の音苦界の耳聞なれし田に蛙の声々も紙きぬたのおとに淋しく田圃の方を見はらし庭の日影に薙を敷引詰髪に取あける此ほどの煩に髪おそろしく色あをざめしんに苦勞をするゆへか目もちくぼミたる事わいのとおもハす涙ほつちりと鏡の上におちたる体となりの紙漉董次が見て姉妹お心もちハよいかへと聞ケバアイしんせつにたづねてくんなんす何かはき／＼致しいせんよ董次ずいぶん大事になせへし髪をいふのハおわるからふ反故か入るなら上やせうにへとて庭に干たる塚塚のかミ屑をくれけれハ嶋浪ハおしいたゞき何思ひなく引のぼす反故の中宋次郎さんの手跡によふ似たと見れバ見るほど紛なく只今ハ柴屋に進兵衛様の御世話にて教屋林兵衛と申生葉やに勤龍在候との文牒大坂方としたゝめ有り嶋浪ハ是を見て飛立ッやふに思ひしが此紙くづハいつて買てどうして爰へと尋られもせず何気なく董次さん大坂とやらハ速ひ所かへわたしハ急にいつてミたふ成りいしたナうそばつかりわつちが氣を引てるのかへと何か物ある董次がこたへ是兼て嶋浪が董次に心有と見せ便なき身の便にせんと思ひもふけし事なれハ幸と董次さん逃てくれなんす氣ハなしかへと思ひ詰たる体にて云ひければ董次ハさも嬉しさふにてそりやほんの事かへしたが鎌くらの中に居てハ超太にさがし出されるいつそ大坂へでもいかふといふもののおめハ遊びでハねへかへ嶋浪ハなミだにくれほんにぬしもうたぐりふかひよわつちやもうしミ／＼こゝにゐるがいやで／＼かたッき居るそらハおざりせんひよつと此事がしれるとわたしやいぢめ殺されんすといわれて董次ハ夢中に

成りその日の明方二人しのひ出田圃道を三河嶋へかゝり裏通りを本郷へ出て董次旅用意を買調へ木曾街道を心ざしその日ハ鴻の巢の宿に泊りぬ此夜董次ハ首尾せんものと思ひしに嶋波ハ駕にゆられ大に心わるし逆更に色情の心なけれバ董次大にうたがひの心をおこしむまらずハ輕井沢あたりにて賣て帰らんものをと工風し七におきて徒をあゆませ熊谷の土手にさしかる時ハ六月土用中甚暑く嶋波照り付られけるゆへにや眩暈して病氣のうへに持病の癪つよくおこりきのふハ董次氣を付て草鞋を綿のやうにうたゝき踵に紙まで巻てくれしにけさハ一倍いぢわるく馬士駕舁のわらんすに綿のやうなる素足血にそまり堪かねてハ行なやミ爰に倒かしこに蹲やゝもすれバおくれける故董次大に呵つていふやう是から大坂へ行くにハ十万八千里という路なり今からそふ引ずつてハ跡へも先へもまいりがたしだよ大きな艸臥もんだで嶋浪是を聞てどうも力がなくていき切がしんす故ついおくれんすどうぞめんどう見ておくれなんしそれをおれがしる事かと董次なをさつゝと行バくるしさつらさ嶋浪ハ痛ミをこらへしんぼうしいきをはかりに追付しかよしないわたしがよなものをつれなんしして懸心つかひてござりんしやうと兎ある酒屋に立より酒肴を買て董次にたべさしめければ董次なを不足がほにてくらひけるが忽醉に乘していたこを唄ひなを足はやゝにうかれ行く是より嶋浪今ハ一足も曳がたく詮方盡れハ酒を買ひ飲する内ハ董次きげんよくさめれバ只願いまゝしき事かなとてぐとぐと口の内にて呵つて往く所にはや日も暮かゝりけれバ其夜ハ商人宿をかりて泊りいかなる意にや董次顔をやわらげて打わらひ嘸くたびれつらん暑氣はらひなりとて焼酎をすゝめて酔しめけれハ嶋波少しハつかへを忘れて打臥たるに董次ミづから一鍋の湯を滾し足盥に傾入れて嶋波を呼おこしあんまり垢だらけて熱くさからふ居風呂のかわり手水を造つてねなせいな嶋波ハその手をいたゞきお心ざしハうれしふざんすかいつそこわらしくう足をはらしてゐんすからおかまひなんせずとおまへさんつかつておやすみなんしそんなに

しておくれなんしてハいつそきのどくでおざんす董次おめへせつかく沸した湯だハな跡の宿で藥を買つて来やしたアちよつとたで、上やせう嶋波夫ハほんにおいたゞき申すあんまりぶしつけらしひわたしがあらひんす董次なんの事つたな船の乗合旅の道連むかしからぶしつけなが氣さんじなものさと打和らぎていふに嶋波ハ是を蒙汗藥とハしらさずして氣にそむいてハあしかりなんとそんならほんにおゆるしなんしへとやがて足をさし伸しけれバ董次ぐつと両足を取つてかのぐらくと玉をちらすにへ湯の内に厭入て暫くも動かざりしかハ嶋浪あつと叫んでそりかへりふるへわなゝき足をぢぢめて是をみるに忽あかく腫上つてそのいたむ事とび上る斗なり董次かへつて大に腹を立て云けるハ人に足をあらハしやがりながら人の面をよく蹴やがつたな人ハ人だと思つて足迄あらつて介抱すれバちつと斗湯があつといつていけてへそうらしひ大きなこゑをしやがつてとその夜ハつ過に至るまでひたすら嘔々と罵りけり嶋浪ハ是を聞て心の中に哀を催すのミにして化るより外一言も詞をかへざす董次が大いびきの傍に夜着にもたれて泣あかす夜明まへに董次嶋波をゆりおこしてけふの道ハ山坂にて大なん所なりはや打ッ立たんと頻りにせり立る嶋波ハ胸つぼらしく飯一粒も咽を通らず病に苦しむのミならずその夜又には湯にて足をはらしけれバ恰も踢輪たる鶏のごとくにて一足も立ざりしかバ誠に哀なる有さまなり董次あたらしき大きな草鞋を買置て嶋浪にはかせけれバはれたゞれたる足いよく破れて今ハたゞ一足も歩む事叶はずはらくと涙をながして身の哀をぞ悲しミける董次是を見て大きなはら立なんの人も身をも怨る事があるものだ早く路を急げとて天秤棒をもつてアと嶋波が背なかを擲けれバ嶋浪ハなをかなしくなミだをなかつて云けるハ何おまへさんを恨んせう元ハといへハわたしからこねへに苦勞をさせやんすかんにんしておくれなんしへ董次咲ふくミ魚心あれバ水心ありさとてそろく嶋浪が手を曳て十四五十かほど妻籠峠にあゆみのぼる小笹原分ゆく袖の露けて谷ハ白雲にう

づミ山々ハ生しげりて日の目も見えず峠通りの目の下ハ木曾川うづまき立ておそろしく嶋浪ハ氣も消目もくれて岩崖につまづきそのいたミにせまり路に倒ふれて大キにさけびくるしミけり扱此所に沓の林ありけるが霧とち煙籠り物凄き大竹藪なり即是木曾の御坂にて街道一のなん所是より深山の入口なり此時董次ハもてあまし嶋浪を引ずりて藪の中に入り樹の根に腰かけししばらく多葉こをのミて休むに嶋ナミハいつそ正鉢なく狂ひ倒れて叫ひくるしむ斗也董次獨言に大キにこいつゆへ氣を癆かしたる故にや眠きざしたりとて艸のうへに臥せ睡りけるがふつと起上る嶋浪ねなんせんへと聞に董次うまくねぶらふとしたがひよつと逃られてハと氣が付て目がさめたハそれハあんまりまはり氣でおさんせうわたしも逃走られるやうならぬしの厄介にもなりんすまひものと思ハざ縛られてゐてねふらせろそれほどまでにうたがりなんすかへほんにおつかれておざりいせうよぬしの氣のすむやうにしておよりいし董次是を聞て則柳こりのほそ引をほどき取つてやミくづをれし嶋浪を高手小手にしバリ上木の根に捆付て天ひんぼうをふり上嶋波が眉間に劈して大に呼ハつていふはるく此所までうぬが供をして来たハ腹いせに爰でぶちころさふ爲ばつかりだハこゝな死さがりのふんばりばいためがな嶋波ハ是を聞てあるにもあられずなるほどぬしの腹立なんすも無理とハさらく思ひせんが死そこなふて大坂で逢たひ見たひその人に一目逢ふた上ならバどうとも致しんせうほどにどうぞ助けてくれなんしと大こゑ上て泣侘れハ董次ハ片肌ぬきになつて今更たわことその手ハ喰ハぬと既に棒をしごきて嶋ナミが眉間にかきして打つてかゝる処に松の木のうちより雷のごとく吼る声有て一條の金剛杖地を拂つて閃き来り董次がてんひんぼうを只一打にはるかのそらに打飛バせて一人の大ぼうず市川弁慶に等しく頭ハれ出いかれる聲ハ破鐘よりも響き渡つて大に罵つていふ最前よりうぬをまつてむづ／＼していたたきころしてく

れんず連金剛杖を風車のごとく廻ハして董次を打ころさんとするに嶋浪ハ地ごくにて佛にあふたる心地して見るに是則鎌くら名うてのろ和尚深太郎なりしかバ嶋波ハ蘊生たる嬉しさは是まつてとおし留るにろ和尚ハためらへハ董次ハ大キに膽をつぶし只うつかりとしてあきれたる斗なり嶋浪ハ嬉しなミだにかきくれて宋次郎さんの大坂にと聞たをたよりのぼりたき鎌くらをにげて来んした元ハといへハわたしは年事此人さんに咎ハないかにんして遣ハしてくれなんしといふに和尚まづ嶋浪がいましめをほどきて谷かげの清水をすくひ嶋浪が懷中の丸葉をのませ介抱しくるわを出なすつたやうすを聞きつそく尋もいたしやせぬ恨んでくんなせへすなタビ一はたごやにとまりあハせ次の間にこいつが悪工をみるににえ湯でおめへの足を仕そこないそのうへ夜通しごたくを吐出しておめへをいぢめやがるその時飛で出て打殺そふと思ひやしたが是にハやうすが有らふと腕をさすつて堪へやしただけさ見へがくれに此藪の内に来り今かくと待て居やしたさるとう人のびい／＼がらくたこつ帕やろうめ幽霊の瀟風にあたつたやうなものをうぬよく仕事にしたな是からおれが御あいてだとまたこんがう杖を振上げるに嶋浪おしとゞめいろ／＼に侘れハろ和尚やぞうを以て董次かしやつつらをはりとバしうぬひねり殺すやつなれどぬしのわびといひ善光寺参りの事なれハ助てやるそのかわり大坂迄お供をしるやだとぬかす此金剛杖がすてつへんへお見舞申ぞよ董次是を聞てがた／＼ふるひ頭を大地にすりこんで手をすつて云けるハおや方命さへ助けてくんなさらバこなさんのい／＼つけ何なりとそむきやすめへよ迎にハかに嶋ナミをおしようさまのやふにうやまひろ和尚に随て上下のごとく大坂さして急ぎけり

深太郎大きに酒に酔て仁王嶺を打

深太郎ハ董次に荷物をかつがせ嶋浪をおくつて路を行く事十八日にして伏見に至りしかバ此所より大坂へハ十三里淀川を舟にてくだるなれハ迎董次にいとまをやるに董次深太郎に小そうのごとくおひつかハれ此十余

日が間片時も自由を得ざりしが此時にほつとためいきをつきていづくともなく別れざる二人ハ今宵の夜ふねにのらんと大キなる船宿に入ッて見世に待合せろ和尚まづめでたしとて酒を求酌かハしたのしみけるがさかなくなりしかばろ和尚手をたくに此時大勢の女とも奥座敷の客をもてなし大さハぎの体にて客人も来ざりしかばろ和尚忽腹を立大聲を上どなつていふ是、上方のさる松めら鎌くらものを安く見やがつてひつとりも面をもつてきやがらねへか小半でもあてるといふのじやアねへハへとて見世先にふんそりけれバ亭主肝を潰して出来り奥座敷の御客様ハ大坂の柴進様と申まして達衆ゆへ龜末にとんとならんさかいおまへさんにはんにぶてう法仕りましたと上手こかしに色々と忙けるが和尚ハ柴進と聞てそれハ柴屋進兵衛の事かとて奥座敷へ行てみれば柴屋進兵衛奥山にさも似て女子共相手に酒盛最中たがいに顔をみるより大きにおどろきまづ其後の無事を悦び合ふこれ柴進ハ大坂の達衆にて道頓堀新町の口きなるが鎌くらへ下りし時ろ和尚か世話になりし事もありろ和尚ハ嶋波が身の上をかたり先達て頼て登したる宋次郎が事を聞くに柴進されバ出入の生業や教や林兵衛といふ内に手代を勤めて今でハのらもやミ京へ商用でのぼつてじやが今夜の夜ふねにつれだつてわしと一ツ処に下る筈宋次郎さんハどこへいつてじやアおてうづにおいでなはりましたと女どもがいふを聞より嶋浪ハ飛立ッ思ひおししづめ座をたつてうづ場の椽側待つとハしらす宋次郎かん所の戸を押ひらきて立出さま嶋波を見付手を洗ふも忘れてきもをつぶしけれバ嶋なミハ思はず膝にすがり付嬉し泣に泣けれハ宋次郎もそぞろ嬉しく振付たさをじつとこたへて詞なし嶋なミ泪もろともに何もそんなにめいわくさうなかほ付をしなんす事ハおつせんハな去年の春から丸一年二年ごしにおとづれなく誠をいわぬしの方から状文にても一度か二度ハおよこしなんすはづの事夫ゆへに此病やせおとろふたが目にもえぬか死かゝつて居んすハひなほんに今の身の上でハぬしもあけしし間もないやら肩身もすばき

つふやつれなんしたぞと男のかほをじつとみる目にもつ涙たちかね身にはらくとふりかゝる艶なき髪の艸束ミる男氣もむね一ッはい水あたりやら旅やつれやら骨と皮はかりになつたのうとしめり入たるかこち言此時ふたりが心の内ハやつはり世話するりのごとくなるべし障子越に聞居たる柴進ろ和尚二人を座敷に伴ひて酒をすゝめて盃をさせ其夜四人同船にて大坂へ下り嶋波ろ和尚ハ柴進方に落付ぬ宋次郎ハおや方教屋に有ながら是より更に居るそらなく遠をミてハ柴進方へ逢に来るも尤の事そかしかくて嶋なミハ柴進方に半月あまり経たりしかハ病氣本ふくし生れかわりしやうに誠に麗しくなりけれバ大坂の金もちたちは是を見て嶋浪を囲ひたきなど或ハ百兩貳百兩にて囉らひ度なと幾口となく柴進方へ云入れとも嶋波ハ手鍋さけても宋次郎と夫婦になり度思ひ入なれども二人が今の身の上せんかたなく宋次郎と相談つくにて藝子となり名をもおししようと改店をかりて一人の母おやを貰へり舞ならでおやをもらふとハおもしろき氣性なり迎大坂中の大評判となり藝者おしやう迎猫もしやくしも云ひはやす事おびたし愛にとりのみせハ水茶やにて奉公人口入するばア客人住居けるが其顔煩至つて赤きゆへあた名を仁王嚙といふある日三十四五の大盡らしき侍見世に茶をのミ休るたる所におしやうハ湯かへりと見へゆかたをかへて仁王嚙が見世に立よりかゝと二ツ三ツ咄して出行かんとし思はず駒下駄にてかの侍の足を蹴たりしかバおしやうびつくりしてまつびら御めんなされましとくりかへしいふかの侍ハ喉をふくみていふやう是ハ御めんぎんなたとへ蹴ころし給ふとも何のくるしき事あらんおゆるしなされませとおしやう愛敬をこぼして出て行うしる姿をかの特見とれ入つて居けるが仁王かゝに隣の藝子なる事を聞て出行けり此人ハ西国方の侍慶藏とてしかも金持なり翌日嚙が見世先を二三遍かなたこなたへ通りけるがおしやうが家の格子の脇にゐてしはらく簾の内を見込て立居たりけるを仁王かゝ見付てお休なさりませといふに慶藏すなハち腰をかけて昨日の婦人ハ内にかと聞く

噂けふハさる御客と芝居へ参りしといふ慶蔵世事咄する事や久ふして
噂に語ふていわく御亭主ハ無きやなくハ世話いたそふかいかに噂わらつ
ておまへさん此年になりてと云慶蔵又かへりに寄りませう迎見世を立て
出にけり噂ハ又茶を煮て客を待ける処に日暮まへになりて彼慶蔵又来て
噂が見世先に腰かけて「おしやうか門口を望見る噂此時香煎をほだて
ゝ飲しむ慶蔵のミほして云けるハ此香煎味ひ甚よろし直段ハいかほどに
てもよしもし序あらば買ふて給はれ噂わざと聞誤りたる体にて云ひける
ハ高が奉公人の口入の口錢何ほどか取りませふぞ慶蔵笑ひながら此香煎
の事をこそ問けるに口入の口錢と聞ちがひかなといふにか吹出してき
やうこつに笑ふ慶蔵も喉をふくミながら聞くやうかの隣のげい子ハ年ハ
いくつぞや噂がいふかの女ハたしか今年九十三なり慶蔵大に笑て此氣違
はゞめ人をなぶりをるかい迎座を立ていそぎ出けり此時日もはや暮けれ
バ噂かけあんどどうへ火をとまんとしける所にかの慶蔵又来て見世ばな
にあぐらをなしおしやうが門口をひたすら望ミや久しく休ミゐた
るが又床几を立てて又明日来るへし迎帰けり仁王か翌日早天に見世
の戸をひらきて外面をみるにかの慶蔵おしやうが格子先の下水小便を
する体にて立居たり噂心の中に思ひけるハ此侍の心のほど知られぬ思ふ
さま鼻毛の数を箒盡して錢もつけせんものをとよるこんでさあらぬ体
にて茶碗をあらひ居たりけるに慶蔵やがて見世先に腰をかけひたすら首を
かたふけおしやうが門口を窺ひる噂ハ何気なき体にてけさハ何方の
風吹てかお早ふ御出なさりしや迎鉦を出す慶蔵茶をのみて同しく戯れて
云けるハ噂おれが茶をすけてくれめさぬか噂ゑミをふくミながら年二三
年も若くバおまへさんと茶のミ友だちにもなりませふものをと云慶蔵
是を聞て大に笑ひ懐中金子巻分とり出しか「あたへて云けるハ
是からより付になりて世話にもなるべし是を茶錢にせよ噂そら笑してお
茶代にハ多ふござりますといふを慶蔵ひらにとかゝが手に握らす噂心の
内に喜んで思ふやう此侍はや眞の手を出したり我そろく是を釣つて

遊はんとはかり則金を戴て云けるハ旦那さんハ何か此ころ御心のもめる
事有つていかふおふさきと見へまする慶蔵いふどうしておれが心を
察したるや噂いふ日々多くの人を取扱ひおりますれば大概人さまの御
氣質も二三べんてしまますて慶蔵聲をひそめ身共實に一つの願ひあり
て氣がもめるなりおぬし此事を推して見やれ噂うち咲て云けるハ旦那此
二三日頻りに此邊に御通ひなさるゝハ先日御ミあしをふみたる此となり
のかの人が御目に留りたるに違ハござりますまいがや慶蔵大息つて
云けるハ實に身共彼人に迷ひもはや活ても死てもじやんと出来る仕や
うハ有まいかな噂なめ過たる聲音にていふやうかの人ハ大坂第一の美人
引手あまたにてござりますれども當人はまだ錢金つくにて得心いたした
る事ござりませぬかわたくしらがかくらバよも手に入れぬといふ事ハ
ござりますまひ慶蔵もしいよく此事を出かしなハ口錢のぞミにまかす
べしといふに噂此事をとく心させますに四ッそろハねバならぬ事がござ
りまするて先此四ッの事世の中にそろふたる御人あまり無ひものでござ
りまする第一と申まするが男ふり第二ハ金第三ハ氣をながく第四ハ毎日
ひまなくてはなりませぬ慶蔵いふやうその四ッの中三ッハ身共實に随分
いかしやうやう共致すべけれ共第一の男ふり我らいろなま白からずとも金
銀の事ならハ天人大仏のつらでもはるべし噂いふ第一の男ふり飲てハと
り持長引ますれども第二の金を第一の男ふりに勝ほどならバついに八十
に九ッ出来まする物也又わづかの所に至つて一厘の欠か障になつて出来
かねまする事もあり慶蔵いふハもし金錢をつかふべき所あらバいかほど
も申聞べし一刻もはやく埒明す孔明ばかり事ありやいかに噂打ゑてい
ふ今日ハまつ御かへりなはれて来年の今頃おいなハれ慶蔵是を聞て何卒
急にこひねがふといふ噂ほやくと笑ひとかく御氣をながくおもちなさ
れねハ出来ずまづ所の若ひものどもに鼻薬をやりておまへさんのぬくわ
うをミせおふくろからとり入つてかの人に思ひ付けねバならず夫に
付私に單もの一ッ端買ふておくんなハれかの人毎朝天王寺の庚申さまへ

朝まいりをいたすなれば明朝五ツ過にお出で、おまちなはれその時かの人をよび入て此御客より此ひとへものを賜りぬとて裁てもらひ度壁をせうを致すに此時かの人むづかしき顔付にて何気なくバ此事さつぱり思ひ切給へかの人もし万一縫てやらんと申さば是まづよしと思しめせその時私か内にて縫ふて給はれと申すするにかの人もし内へ持帰て縫まするならバ此事さつぱり思ひ切給へかの人もし気がるに私が内に来て縫まするならバ是大方の出来と思しめせその時旦那をおちか付にいたします程に丁寧にあいさつなされ私に云付て酒をあつらへ給へかの人もし此体を見て内へ帰らバ此事さつぱり思ひ切給へもし此やうすをミてもしらぬふりにてぬつておらバ是まんざらならぬと思しめせ是からおまへさんの事ほめちぎつてかの人の口裏を引て見ます間何月かゝらふも知れませず十に九ツまで漕付ても生ものゝ事なれば九分九厘にしてわかり兼ねる事もあり其間の御もの入埒明ずなどゝじれて腹立給ふずならバ此事只今さつぱり思ひ切給へと云けれバ慶蔵大に悦ひはや事なりたる心地にておぬしのはかり事陳平張良にも勝りたるとて噂が好みの綿がらまで委細に書付て出行けりかくて慶蔵その夜ハねられず青梅縞一反買とゝのへ家来にもたせ翌日早々噂が許に至りけれバ、噂笑つてかの人のいづも朝寝なるがけさハとく作り立て出ましたるがなるほど御迷ひなされたもむりでないとてもたせかけて待所におしうほどなく庚申堂へ朝まいりのかへりがけにて噂が見世の前を通りすがいけるを噂呼入てけさハ御はいねといふおしうにつこりとしてなんぞいふてかいな大に夕酒をもちこしやしてけしからずねわすれやした噂又いふ此旦那にねひとへものをもらひ申やしたが一寸見て御くれとて戸棚より風呂敷に包たるかの反ものを取出しけれハおしう是をミてほんにうつくしひ綿がらねおまへにハとんだ似合ひやすよわたしが裁て上やう逆座しきに上り、噂に針箱を出させて先かの端ものを裁ッ慶蔵此体をミて仕たりと思ひ噂に呷ハ、噂酒を、あつらへに行さまにて既に下駄をはきけれどもおしうおよ

しなされませといふた斗なりしかバ噂ハいそぎ出行けり跡にて慶蔵ハ手持ぶさたにておしうも顔を上ず慎ましげなりしバらくして噂酒肴を調へて帰来り、旦那の御ちそうなり迎出して酒をすゝむるにおしう仕事をやめて慶蔵が盃をいたゞき心嬉しさふに酒を過ぎ又針を取首をかたふけきげんよく縫ふ慶蔵心の内大にいきミ此日長居ハあしかりなんと丁寧にあいさつし心残して帰けり凡世間の女十分ぬけぬきもの有といへども思ひの外洩へき透間ありて深き工にハついにその坑に落るなり是よりおしうハ毎日噂か内に来り心安く出入しけれハ噂毎日酒肴を出して夕酒も慶蔵さんのお出でにおまへにもよろしくなどゝいふにおしう真実に伝言をしけれども噂慶蔵より十兩取たるうへなを出させんと思ひその時を間違ハしておしう出逢ハせずくわしきやうすをも語らず只御気ながにのミといひて日数を過しけるがいつからとなく慶蔵おしうと膝をくミて打とけたハふれいふまでになりけれバ慶蔵大にせき込ではや妾のやうに思ひ給金とて一ヶ月五兩つゝ送りおしう親子に仕着せをして小づかひ家賃まで仕送る事とハなりぬ謬にも悪事千里をはしといふ事あり果して近所のもの悉く此事を知れり此時噂慶蔵にちゑをかいと所の若者に残らず鼻葉をあたへけれバ誰あつて指さすものなし然るに和尚深太郎にハ柴進が部や子となりて居けるがある日居酒やにてとつちりと酔て仁王噂が風聞を聞て忽向ふ鉢巻になりよろゝゝとして仁王かゝが鬼世によろめき来たり敷居に躓きおのが力にはづんで轉ひ入けり仁王噂ハ芋をうんで居たりけるが此体をミて不肖ぐに立つて茶を出しけれハ和尚舌も廻らず水をくれやアがれとてその茶碗を噂が顔に打付たり噂くわつとして悪ちやりおけやいとへんとうす時に和尚大はだぬきになつて噂がつらを一ッはりこかし耳朶を撥て庭へ引ずりおろし小腹を蹴て真仰に蹴倒し仁王かゝの強欲者め三途の川で洗濯させんとて門を真二ツに踏折てしたゝかに打のめしけれバ噂氣絶て目口より血出て糠防のごとし此時向三軒、両となり大きに恐れて中へはいるも

の老人もなし頼て所のもの大勢手くへに棒をもつて馳あつまりけれハ
和尚酔ますくのぼり後をまくつて座敷の真中に尿を撒れ略々と吐散ら
しけれハ見物の大勢わる臭きにたへず皆袖を掩ふて跡じさりする和尚ま
た一桶の水をのミかたふけて外に打つて出けれバ取圍たる大勢ッヤと
いふて二三丁東西へ逃散たりけれバ此間に和尚溝板をはつて四方八
面をなきたをしくいていくともなく落行ける慶蔵ハ此夕かた例の通り
鼻が方にて酒を奢りおしようと思ひ衣服欣々と出立て髪
結床に立よりける処にかの鼻薬をかへれたる軒八といふ若者大息ついで
来り且那只今仁王鼻の見世を和尚深太郎といふやつ微塵に打壊し
て逃ましたわつちらがるバいぶちのめしものさ聞バアおしようにハ
教屋林兵衛といふ生薬やに勤てゐる宋次郎といふやつか下地亭主で教屋
の娘が首だけで舞にせうといふそうだがね宋次郎ハおしやうと訳が有
からいやだといふ此事がおやかたへ知れて今朝いとまが出ましたとさ
る和尚めハ此宋次郎がしりもちだと申事と聞ましたと語りけれバ慶蔵
是を聞て心も心ならずいそぎ髪をゆひ仁王かゝ見世へ至り見れハは
けんくわ過ての棒ちぎり木傍に取ちらし戸をたて有ければ慶蔵力なく
たゞずミて戸のすきより内のやうすを覗みれハ大勢あつまりて大にもて
かへす時に隣のおしようかおふくろ慶蔵を見付次第を語りて我内へ
ともなひ座しきへ上げぬこのおふくろの心の中に思ふやう蜜にる娘か
恋人ハひがいにすな言文なしのびんぼうやう此慶蔵ハ大金もち娘が爲我
か老のゑようをきハめんものをと則にこやかとしておしやうや旦那が御
出なされしと呼ひけれバかのおしよう二階より下り来り慶蔵を見て怒き
げんよく傍によつて芝居咄に事よせ何やら云ひたげなりおふくろハ今宵
初夜過なり旦那いつそ泊りなされとて勝手に出燈を瓦燈にうつして休
けりおしやうハ慶蔵を二階にいざなひて此ごろハ新町へばかりお出と見
へてこちらへハきつう御見かぎりねとてひたすら慶蔵が顔をながめて媚
けりそのぎん出しの薫りに慶蔵ぞくくハすれども軒八かいひし

事胸にあれバ大におしやうをうたがつて物をもいわずふくれて居るお
しやうその心をミて取たれぞにしやくられなさつたかへおふさぎならバ
冷ても売ツとてもし戸棚より硝子の徳利じやまんのこつぷを取り出しひた
すらすゝめけれども慶蔵おもしろからぬ聲しふりて酒ハ断しといひし
かバおしやう是を聞むつと立つて物干に釣したるきりくすかごに瓜を
切つてはさんで遣り金魚鉢の水をほたる籠に露うつてあいさつもなくね
まきすがたになり狎をいだきて休ミけり慶蔵帰もやらず独もの子に涼ミ
いたるがおしやう定めて一手あるらんと思ひける処に豈しらんやおしよ
う團扇つかひをしてゐる内ハ心の頼もありつるにはやうちハもち
たるまゝほそくきやかなる腕を仰てすやくとねいりけり夜もはや
鶏のこへ搗米やの起たるおとしけれバ慶蔵あけらばんと大に立腹して二
階を下りて見れハおふくろハ軒高く真くらなり探り廻つて漸戸の鎖をは
づして外へ出けれバ既に束しらミたり此時慶蔵無念骨隨に徹しうとく
と行く所になつの夜明まへなればはや教屋林兵衛方にハ見世を明はなし
暖簾をかけ生薬のかんばんかけてあり慶蔵ハ得意の事なれば見世に立寄
て多葉粉に通りのけしきをながめて居る頼而主人林兵衛神拝をしまひけ
しからぬ御はやひ御出とあいさつする慶蔵よんどころなき付合にて昨夜
新町へ参り甚酒を過し腹中を損じたり二陳湯を給はるべしといふ
片脇に菅人の手代至つて苦勞かほなるが林兵衛に向ひ昨日夕かた何国の
人ともぞんぜず砒霜一包何の心も付かず賣り遣したりといふに林兵衛大
きにおどろきその人見覺なきやと問手代二十四五の女にて色至つて白く
瓜ざね只にて腰ほそく中肉花奢にして人柄よく當世めきたる風俗藍さび
の帷子に柳茶どんすの帯をノおりしと云慶蔵是を聞居たるが心の中にき
つと思ひあたりたるハ正しくおしやうが形かつかうと云タゞ我にすゝめ
し酒ハその砒霜の毒酒にてハなかりしやと大に怪しみ何気なく聞けるハ
若衆宋次郎はいかゞ致されしや林兵衛ふらちに付昨日いとま遣ハせしと
斗りこたへて済やらぬやうす慶蔵ハ二陳湯の價を拂はんとして懷の

はな紙ふくろを見るに無しきつと思ひ出し慥にものほしに置わすれ来たりと思ひ青くなつていそぎおしやうが方にいたればおふくろはいまだ起らず戸も明たる儘なり二階にかけ上り見ればおしやうふとんをかぶりて寝て居たり慶蔵爰かしこ捜し見れとも見へざりしかハ大にせきおしやうがねすがたを見てたちまち怨胸にせまり我を是までたぶらかし金銀を捨てせしこの程思ひしらせんとふとんのうへに跨のつて既に胸のあたりをさし殺さんとせし所に下よりふとんぐるミはねかへしむつくと飛起たるは是る和尚深太郎也有無なく慶蔵を引とらへて床柱に打付けれハ急所にやあたりけん憐へし慶蔵即死したりる和尚ハ百年めとし観念し畢竟に逃かくれんや逆ミづから名のつて出ける惜むへし此心善に強からざる

宋次郎大雪の夜塾中の古社

されバおしやうハ是迄慶蔵をすかして多く金を取たる事なればと返事せねばならぬ義理づめと成宋次郎もおしやうが訳にていとま出たるが我内へ入れる事もなりかたくひそかに和尚に語りけれハ和尚いかゞせんとして柴進にかたる柴進大和の三輪に陸太夫といふ分限者兼て心安かりけれバ此方へしばらくしのバせ置かんと頼ミの書状を持たせ其夜七ツ時分る和尚おしやうを門口へつれ出して宋次郎に逢はせたりけれバおしやうハおふくろをねこがしにして宋次郎ととも大坂を立のきまだ人顔も見へぬ頃くらがり峠をこして三輪に至りてかの陸太夫が方に尋あたる誠に近郷に並らびなき大なる造酒屋にて一筋の大路ありて松並なり爰を過て石橋を渡り長屋門を這入れバ白かべの酒蔵幾棟となく建続やしきのぐるりハ惣がまへの堀なり二人ハ臺所に至つて柴進が書状をさし出してしかくの訳を云入れる今ハむすこの代にて主陸太夫ハ年若きが暫くあつて出きたり柴進が書状をみてそのまゝとどめ置中く深切なるほど却て心違ひたへず二人ふらりとして百日余りを過しけるある日陸太夫宋次郎に対していふよう貴様長々仕事もなくして居られなバかへつて気の毒にも思はるべし幸ひ麴蔵に是迄としよりの番人を付置たる

が此節いとまを願ふ只ぬす人火の用心の気を付さへすれば済む事なれば御大義ながら此番をしてくれられまじきやとあるに宋次郎心の内に此麴ぐらは本宅より七八町も隔たりだゞびろく薄淋しき所のやぶれ蔵なれば便なくハ思へとも心よく返事して宋次郎はより麴ぐらの番人と成独煮やきをして心淋しく四五十日を過しけれども一人の咄し相手もなく毎日氣ぶんすくれず本宅へおとづれんも何とやらつもられんも恥かしく只おしやうが一度の間ひおとづれもなきをうらミける時正に冬の空にて朔風毎日吹て大雪ふりその寒する事甚だけれバ宋次郎寒氣にあてられ今にも崩れんあばらの壁おちて雪吹込ミ冷凍ハ火にあたつて點然として居たるが越し方行末を思ひ出し思はず涙に火も消たりせめて酒を買て寒を凌がんと思ひ釣して有りしふくべを持てかたく戸をノて雪をふミわけ足にまかせて行けるが北風身を切るばかりにして雪礫を打ッかごとく持病の癩甚しけれバ暫く路の傍に古き社ある所に休ミ則やしを拝していふ神明只今私か身のうへを憐ミ給ハ何卒此病を救ハせたび給へといのり畢て又社を出ていそぎける程にはや三輪の門前に至り町はつれの煮うりやはしり入雪のおやミをまち酒をかふてふくべに入て是を携へ酒を出て杖を突て雪吹に向ひ雪道をふミて漸く麴ぐらに立帰る内に入て見れば元來此麴ぐらハ破れかゝりたる藁やなれバ此夜大雪の爲に屋根ぬけて所々厭倒されしかバ宋次郎心に囲炉裏の火ちつて菰莖にはきまらん事を恐れかの破たる屋根を傍に運びのけ一まひく莖を改て囲炉裏を探りみるに火ハ雪水の爲に浸し滅されしかバ宋次郎安堵をなして表へ出けれバは夜中の鐘鳴り雪いよく降りしる又火をもとむへき処もあらされバ宋次郎いかにせんとあきれ果たりけるがかの先に休たる古やしろある事を思ひ出しさらハかのやしろに行て今宵をあかし明なバきつそく本宅へ行て委細のやうすを語るべしといそぎやしろに至つて宮の中に入りて内よりかたく戸をさして神前を拝しみるに乾からび付たる赤飯かわらけに盛て備へありしを此時空腹に

たへかねたりしかバ心に佗をなして是をさかなにかの先に買たる酒を取出してたのしみ飲まんとする処に戸の透間より赤くさし入てやしろの内火を照したるごとく照りかゝりやきける末次郎大に怪しきそこらあたりをみるに社檀の下に菅人の女かゞまりたり末次郎是をみてぞつとする処にかの女アといふて顔ふり上るを見ればはおしやうなり互に顔を見合て或ハおどろき或ハ悦ぶ事かぎりなしおしやうハ嬉しなみだにくれけるがよくも神佛のおすくひにてふしぎに逢ふた事ぞ陸太夫がわたしを付つ廻しつして酒蔵におしこめられ聞かねバ既に殺さるゝ処をやうく逃て来いしたといふ中に刮々雑々といふ音す何の響なるやと戸をひらきて是をみるにかの麴ぐらの門に火おこつて炎さかんにもへ上り四方屋のごとくなりければ末次郎きうにはせ行て火を救はんとおもひ既に外へ出んとしける処に向ふより人足あつて二三人がほどかけ来る末次郎又戸をノて窺ひ聞に三人聲あつて云けるハまづ此社にて一休み致すべし連三人様に腰打かけその内菅人が云けるハ何しと此計妙にてハ候はずや又菅人が答て云けるハ誠に手まへちが働ゆへじやまハ片付たが女を取逃してハはじまらぬぞや又菅人かいふそれハ御氣つかひなさるな中を飛んで逃れハとて女の足今ばん見あたらすハ村次に廻状菅本なるほど御しんぞになされてもにくからぬ女さのう又かのはじめの菅人か云かわひや末次郎めハもふ灰になりおつたらう此明りで今一はしりおつかけませふとて又三人街道へ欠り行く末次郎おしやうハ内より具に是を聞けるに菅人ハあるじ陸太夫二人ハ管次郎といふ家の作男なり是仏神われくを救ひ給ふなりと或ハいかり或ハよろこひやうやく遠さかるころ二人社の内を出て後の藪をかきわけやにハに首丈の川を渡こして山へよちのぼり命かぎり五里落のびける頃は夜明たりしかバ其日ハ谷影の穴の中に入つてかくれるる

藝者おしやう片岡の山越にて狼を打

翌日七ツ下りに穴の中を出て道をいそぎけるほどに飢につかれとある一

ツ家に入つて一膳めしにてもなきやと聞くに濁り酒の外食もの無かりけれハ末次郎かの濁酒を茶碗にて二ツ三ツ引かけたりおしやうハ傍にあつておよしなせへしひよつとあたつてハとめれハナいハなとて末次郎空腹にハ甘露のごとき思ひをなしてのミ居たる処に菅人の樵夫薪を荷ふて来り見世にやすみたばこのミながら語りけるハけふも病狼を山際で一ツ正打ころしましたてや亭主是を聞て末次郎に向ひお旅人聞めす通り今年ハ狼病付て昼も里へ出申から所のものてつぽうに火縄をかゝさず用心仕ますてやおとゝひも旅人を三人咬殺しましたよ七ツ過ぎてもあんべいに是从から三里行かねバ百性屋もおじやらず片岡といつて狼の巢所でござり申からおらに木賃で泊らつしやひましよといふを聞ておしやうハそつとしながら亭主をみるに月代ぼうゝとはへつらがまちふてくしく行も泊るも何とやら底氣味わるく末次郎にいかゞハせんと叫くを亭主じろりと見たる眼さしの恐ろしさ末次郎も心に是盗人なりと思ひ強ミを見せんと狼などこわがりて旅のなるものにあらずまだ日も高しとて錢を拂て立出るに亭主糶売の火を火縄へうつして用心に持つていかしやませとてかの火縄をくれければ是人に人鬼ハなきかと思ひ又ハ跡より追來りて追剝にやと心せき二人くたびれ足を引ずつて山路をそきのぼる此時日もはや山の端に入かゝる末次郎ハ酒きけんに乗じて落人の爲かや今ハ冬がれて薄尾花ハなけれとも世を忍ふ身ハ跡や先人目を包むほうかふりと義太夫ふしを語りながらおしやうか手を引におしやうハ心も心ならず半道ばかりも行しと覚ゆれば地蔵堂ある所にいたりぬ傍に高札あり末次郎立よとんとてみるに覚一ツ是より片岡の間狼多く日中も出候間旅人商人往來を待合せ道行大勢罷通り可申事尤己午未之外堅往來申間鋪者也月日名主年寄としるしぬ二人ハ是を説酒屋の亭主が云し事眞実なり連大に後悔して麓のかたへ立戻らんと思ふにはやとつぷりと暮て道の程もくらく折しもしぐれをそぼり来るおしやう泣こへにて云けるハもしひよつと狼に出逢ふたらどうしたらよからふねハ斯

ふいふつらひ怖ひめにあふもみんなわたしゆへと嚙にくからふねへ宋次郎ハそら笑をし、もそのよにぐちらしひ心ぼそ事をいふ事ハなひ狼が出たら蹴ころして通るぶんの事さとして又十町はかりも上りしかバ小雨しきりに募一足ハ高く一足ハ低く山坂を上りツ下りツ生きた心地ハさになくおしやうハ口に念仏申て向ふの岡へよちのほらんとする処に忽ち大風吹おこり雨ハ面を打がごとく樹木おひしけりたる中に大に吼るこへ有つて大きな馬のごとくなる狼一足くるひ廻つて飛出けるが二人をしきりににらみ付其眼の光り鏡のごとく既にとび、掛らんず勢ひにて岡の上にはひかへたり宋次郎是をみるよりあつといふておしやうが袖に取すがつて腰をへたる此時おしやう少も恐れすしよせん死ぬ命ならバ狼に喰付てなりとやわか活しておくべきかと消入りし宋次郎が両手を引立その身前に進んで岡によちのぼる此時宋次郎膽魂も身に付かすおしやうハ少も怖怯たるけしきもなくかの狼のまへをこするばかりしとやかに打通るに狼跡しきりして元の茂ミにのさく、這入りけりおしやう見向もやらす宋次郎か手を引て半道ばかり来りしと思ふころ後をかへりみるに狼はや追来らず爰に至つて宋次郎蘊生たる心地してほとと大息をつけバおしやうハ此時にいたり嬉し泣に大聲あげて泣けるぞ理なれ凡女ハ志のもろきものなれども一心凝るにいたつてハ偏に大盤石のごとく大膽不敵になる物ぞかしかの狼もおしやうが傑然たる勇氣にや恐れけん誠にあやふき難をのかれて又半道余りも行く処に風雨いよく冷まじく目ざすも知らぬ真のやミむかふにそのたけ耆丈余りの大入道一、眼の光り輝き渡つてすつくと立居たり二人ハ是を見て大におどろき氣もきへそこにふしめ然るに此入道こゑをかけ御旅人、お連になり申たしといふに二人ハやうく人心地付おき上り是をミレバ誠に吾人の六部笈のうへに笈を付て打鉦をゆひ付しかバ背の高き耆丈あまりにてかの笠大入道とミへ、打鉦の耆ツ眼のやうに光りしもことハりなり三人大によるこんで大に心強くなり物語りして行く処に二ツの別道あり何れか本道なるにやと立迷

ふ此時宋次郎火をうつてたばごを吸付その明りにてあたりをミレハ道分の立石あり則ちゆび先にてほり入たる文字を探り見るに右なら街道とあり則右の道を二里余りやうく麓へ下れバ夜もほのくくと明たりしかバ二人ハ六部にわかれてその日も又萱ハらのの中のかくれて休ミぬ

王子婆甲州街道にて肉まんちうを賣る

斯て二人昼ハ谷かげ萱原にふしかくれて夜のミ道を急伊賀越をしてやうやく宮まで出けるがおしやうが姿目に立バ、東海道ハ氣つかハしく宮より甲州まで五十余里の山越にかゝる此間三日路を過けるに都て山路の險巖にて食物なくたぐ柿木の實のミを食として行くほどにおしやう今ハつかればて、一足も引かれず宋次郎も精つきて昼ながら猪さるの声するかゝる山中に夜を明かすも覺束なく進退爰に極りたる処に耆人の馬子唄をうたつて来り此体をミて戻り馬なり借らずやといふ宋次郎大によるこびておしやうを馬にのせて耆ツの難所を下りけれバ目もはるかなる原に出たり馬士頻に馬を追立けれバ宋次郎ハ引そふて道をいそぐ所に芦葦の中に髪髭いが栗のごとくはへし皆つづれを着たる大の男八九人、高々と咄して酒をのミ居たるがかの馬士是をミてけふのおらが代、物を見てくれとて松の木に馬を繋たり宋次郎心せきて馬をせり立けれ共一向聞入れぬふりにて同じく連りてひたもの酒をのミくらひ皆々目もすハリ腰も立兼るほとに酔けれハ宋次郎ハおしやうが手を引て一ッさんに逃出しけり誠に命かぎり根かぎりとかけたりけるが一ッの河端に逼りて日も既にくれかゝる此時二人ハ跡より盗人共追来るべしいかどハせんとななたこなたとみるに向ひの岸に一艘の舟あり二人声をあげて渡し舟くと呼はりけれハ小屋より耆人の男仲欠して舟にのり艀をおしてこなたの岸へ付二人をのせて又河中へ至りける、が芦葦繁りたる中へ船を漕入棹をとどめて、旅人酒手をもらひやすべし船ちんも乗合とハちがふによ能々きハめて岸へ着やすべいとたばこくゆらしてゆすりかゝる処に河端に一人の男立出船と呼ぶその一聲を聞と此せんといいそき船を岸

漕付ておやかた御はやひ御かへりと云かの男船にのりうつるを二人是を
みるに背の高さ六尺ばかり月代のびて色白く大とてらを着て胴鉄の朱鞘
をおとしさしにしてひより下駄をはきたり是くりから龍紋九郎なり紋九
郎も二人をミて思ひ出し先年和尚のかかりに土の簀に入りその後霍か
岡にて干羽づる放生會のおりから大赦に逢て命を助かり鎌くらを追はな
され此所に来りし今ハはたこやの亭主と成近郷近在の達ものも成た
りふしきにも御出合申たり迎船つけバ三人上りて二三町行けバ少しの
町屋あり則紋九郎二人を我家に伴ひて半年あまりいたわりて置けるが二
人が心思ひやり宿の明家を見立餅ミせをひらかせたり此時に至りておし
よう宋次郎産霊神の赦を請たるにやはじめて夫婦の交をなしひんくを
樂にくらす誠にかゝる山家にてハおしようか答はき溜へ霍のおりしこと
く玉子をむきたるやうなる顔なり迎玉子婆と評判するある日老人の旅人見
世に立よる此人ハ鎌くらにて大商人のむすこにて久しく大坂の店に仕入
にのぼり居たるが上下老人を俱してかまくらに下りけ甲州身のぶ山へ
参詣せんと此街道にハ来たりたる也おしやう強飯にてもなきやと聞
かれおはつかしなから米とてハ所のもの見もいたしたる事候はずとう
ぼうしと申ものばかりたべますといふにかのむすこ大にあざ笑ひけれ
ハおしやうハ誠にはつかしげにかほ赤らめて袖を口におほふその横かほ
むすこじろりと打見やるにつづれのうへに細帯をノ眉生へ鉄漿付ず髪ハ
いつ束しとも覚へぬ藁やの塵煤けたる中に手拭かふりたる顔立のやさし
さ花の鎌くらにまひとり有べきとも覚す色くつきりとし白き手あしの
しなやかき風俗物ごしの気高きいかなるよしある人のかゝる山家に落ぶ
れ玉ふ事ぞとそごろに心床しく思はずつとりとして愛にかけたるか
んばんの肉まんちうを啗ッ給ハれといふに、おしやうゑミをふくミ近
在にさとうもなく猪さるの肉にて丸めたる稗たんこにて候へハ鎌くら
御方の御あかりなさるやうなるものにてハごさりませぬといふを宋次郎
立てかの肉まんちうを所望せしが中々一口も食へされども大にめづらし

とてせうくわんし永休ミなしかれば上下のものはや御立とせり立れど
むすこハ何とやら取残したるやうすにておしように聞けるハ此所に宿屋
ハ有ませぬや、わたくしがやおふんの方がやど屋にて亭主ハ鎌くら生れ
にござりますれば随分奇麗にしてあげますおとまりならバ御案内申ま
せふといふにむすこ上下に向ひけふハいかふ艸臥たりまだ早けれども
宿を取らんとて則おしように案内にたのミけれハおしやう紋九郎が
方にいざなひてその身ハ立かへりぬ思ひきやかのむすこハ顔色うつとり
として食もすゝまさりしかハ上下氣つかひて御心わるふござりますかと
問ハれて息子今ハこらへかねていふ先々ほど餅やにてふと見うけたる
女に心迷ひ實に死る程に思ひ詰たり何卒金づくにて念をはらす事ならバ
いかほどにても入用くるしからすもし得心ならバ鎌くらへも連て下るへ
し逆誠に思ひ入たる体上下はじめの程ハ異見せしがいかさまにも執心ふ
かきやうすを見受てよぎなく此家の亭主達衆といふを幸ひにひそかに紋
九郎に逢ひてむすこが誠にしうしんの事をたのミてみるに紋九郎お若ひ
事なれハ御尤ながら彼ハ主あれバ御とりもちいたしがたしと云はなれ
されむすこハ大に力を落してその夜ハうつら／＼とねもやらず翌日病氣
づきて四五日逗留したりけれバ上下大きにあんじ病を問ふに全くかの
迷ひより起しかバ亭主紋九郎にまつかう／＼の次第を語りて命にも及
ぶべしとて再三折入つて頼ミけるに紋九郎も誠に氣の毒に思ひ出来ぬま
でも念ばらしに一度ハ聞てしんぜんとて宋次郎をよび上下と共に段々の
子細を語りけるに宋次郎思ひの外納得したり豈はからずや紋九郎ハ只む
すこが念ばれにいふまでの事なるに宋次郎金に目がくれ得心の体なれバ
心の中大に見下へはて猶おしやうが腹をさぐり見んとおもひおしやうが
方にいたり具に事を明かしてまことしやかに成て返答を聞けれバお
しやうハ是を聞て大におとろきけるが紋九郎が思ひ入ての頼ミ胸にせま
り返答をいひ切かねて当惑の体紋九郎ハおしやうをも半ハうたがひ半ハ
よもやと思ひながら我家に帰りてむすこに大方なりしよしをいふにむす

こハ嬉しき顔に顯ハれて内巻より小粒甘雨とり出して十兩ハ酒代とて紋九郎に禮を云けるに紋九郎十兩ハうけ取て手まへの酒代ハ堅くうけ取らすかへつて悦ハぬ男氣にむすこ達でとも云ハれず只ひたすらのミ入り紋九郎心の内ニ宋次郎を大きににくしミむすこがしんじついとぞ可愛く思ひよし／＼此うへハ此事をとり持てちく生やろうに耻をあたへんものをと⁵⁰腹立し宋次郎が内にいたり夫婦をそろへていよ／＼の所を念入れけるに宋次郎もとも／＼おしすゝめけれバおしように返事に及びけり紋九郎則かの十兩を宋次郎にわたし晩にハはづして酒なりとのミ給へかならず笑ひにしてくれてハ男か二人すたるによりて宋次郎をミるに誠に得心の体にて金をくわゐる申し遊びに行く体にて出行けり其日もすでに暮けれバ紋九郎かのむすこをともなひておしよか家のうらよりひそかに入けるにおしよハひとりかべにもたれるたるが見向もやらずいつも紋九郎がくれハ積も納るくらひにてきげんよかりけるが此時はなハだ不興にて座にすハリても猶かほをそむけて⁵¹腹たち姿なり紋九郎ハ調置たる酒を取ひろげさすがそれしやの果とてかれ是座を持て能ひ時分迎にまいるべしとて出行ぬ跡にハおしやう一言の詞もなく何のつきほもなかりしにむすこハ心の内に金を鳴らし轡を打既に恩愛を打まじへ雲雨渡つて後おしやうハ只うつふしてさめ／＼と泣けりむすこハ是を見てふしんに思ひ何ゆへ泣給ふにやと問ハれておしよハ涙をぬぐひ云けるハわたし事ハ元鎌くらにてさる武家の生れ不圖したる若氣の出来心よりかく零落種々さま／＼の憂きかなんそれつらひでハなけれども十年このかたつれそふ女房を金にうる亭主の心とふつと御目に／＼つたおまへさんの数ならぬわたしを⁵²是ほど迄に思ふて給ハる御心根と思ひ合すれバ口おしひやらくやしひや／＼わたしハ生きてゐる氣ハござりませぬとねまき帯をもつて既に首を溢らんとせし処に戸を明て紋九郎飛で入やうすハ残らずあれにて聞た尤だよ何にもいふに及ハぬ旦那鎌くらへ連て行て遣つて下されませとて則二人を我家に伴ひいそぎ

支度をさせて出立たせ紋九郎宿はづれ迄おくり来てむすこにおしやうが身のうへを殘る方なく頼ミけれバおしよとむすこハ紋九郎に礼もいひかねてなき別れけり爰に宋次郎ハかくともしらず他所にて遊びふかし夜明て我家に立歸り戸を明てはいりミれバおしやうハミへす⁵³して紋九郎腹十文字にかき切うつぶしになつて死居たりそのまへに血にて書付たるもの有り宋次郎大におどろき其書付をミるに書置之事一此度貴殿妻女をとりもちいたし候うへ今朝冷落致させ候ニ付貴殿へ申訳のため切腹いたし候以上宋次郎殿へ俱俚迦羅紋九郎と読もおはらず宋次郎茫然となつて只あきれ果たるはかりなり

孫勝法印大峯山上にて幻術を使ふ

扱も宋次郎ハ人のわらひものとなり今ハ西ハとちらといふ身のうへになりけれバ道心堅固の大願をおこし行者講の中間へ入大勢連にて大峯へ山上しけるに宋次郎ハ始て⁵⁴なれば新客連先達道々の世話をやき高山深谷を誘引しけるが誠や谷々の水音ハ経のこゑかと耳そびへ松吹風心根にてつしそざるに有かたく鐘かけといふ岩壁になつて同行ミな信をとつてのぼる中に宋次郎ハ新客の事なれば此所において心に微塵でも非道の覺あらバつゝまず懺悔し業障の垢をすゝひでのぼるべし少しにてもかくされなバ御咎有へしはやく／＼さんげをし給へと先達の申しへ恐しく宋次郎生たる心地ハなくて私事阿嫂を奪ひおかしたる大罪ありとさんげしけるがたちまち一天かき曇り丑寅の方より黒雲一むら覆ひ来たり宋次郎が首すじをつかんで数千丈の谷へなげすてけるがふしぎや⁵⁵宋次郎谷底に落て死もやらず目をひらきて見るにかたはらの木の枝に女ぼうおしよ引裂かれかけてありしかバ其あさましきかきりなくぬく処に異形の山ぶし忽然とあらはれ出汝がさんげいつわりなり包ます明かせと有けれバ宋次郎ハ思はず頭を地に付今ハ何をか包ミ申さん某子細あつて阿嫂をうばひ立のきしといへとも十余年老少も寢席をまじへたる事なしとさんげしけるにぞ時に山ふし引さかれたる死骸を木の枝よりおろし印をむす

へハ忽おしように息ふきかへして疵口いへ今ハ誠のさんげをいたさん舅御ミづからに執心ありいかにも夫の恥辱なけかハしく家老呉服用大夫とひ53オそかに相談のうへ是なる小舅ごと家を出たれども十余年が間ついに帯を解たる事候はず心の潔白推察なして給はれとふし拝めハかの山ぶしよきかなく夫ぞ誠のさんげならん我ハ是先年おことの病を加持せし孫勝法印なりその節雲氣と消去りし悪魔強伏の御札はにありとて取出すに二人ハいそぎかの御札をひらき見れハ中に一通の去狀あり其文言三くだり半に云

尋効之宿縁淺只今

離縁之上者相互不可恨之

於然者隣家江雖嫁申分

無之候

月日

當名ハおしやう殿と有て正に夫武太郎が自筆の名乗書判なり見よ兩人かゝる去狀の有るうへハ邪淫とハいふべからず舅の爲夫に耻をあたへしにハ似たれども貞女を捨て貞女を立し是迄の難行苦行に飯の汚名をそゞぎたる六根清浄の行者おしやう女人けつかいの掟を破つて御山を穢さぬ氣どくを目前尊むへしまつた末次郎事ハ父兄の爲と云ひながら水におぼるゝとも手をもたざる阿嫂を奪ひし罪障こそ我法術を以て兄武太郎を美少年の旅人となしふたゝび54オおしやうを奪ひ返させたり是にて不義の罪ハ滅したり今ハ高休入道卒したれバ貞女孝子家にかへすとありけるに白雲一むら下ると見へしが二人を虚空に卷上て麓の方へ落しけりおしやう末次郎奇異の思ひをなす所に用太夫はじめ道中の供廻り美々しく待うけ武太郎にハ妻の貞心舎弟が孝行感するに余りあり迎鎌倉の館ハ伴ひかへり夫婦兄弟むかしにかへる榮花の樂ミなを悦びを重ねけると思へハは一睡の夢にて末次郎目を覚せば我部屋に勤学の仮寝なりけるゝ、ミん人何とかする爰において双眼に涙を拭ふへしゝかなしひかな

いろは醉故傳 大尾

54

或人曰好色淫逸ノ文今コレヲヒラカハ淫ヲシメス也汝ナンソ教トスル也余カ曰夫聖人ノ前二道ヲ語ルヘカラス教ハ小人ニナレリ故ニ教モ又術多至正ハ恐テ小人ノ入サル処故ニ聖人光ヲ和ケ座ニ同ス聖人詩ヲケツリ樂ヲタ、ストキニヲイテ淫奔汗辱ノコトハヲケツラサルコトハ其アシキヲミテハ是ヲ耻テ正ニ歸セシメンカ爲ナリ人感スルコトナキニアラス感シテコト通ス易ノヲコル処ナリ今如此朽レル狭邪ノ草紙トイヘトモ此ノ文ヲ見テ若此義ヲ會スルトキハ自ラ省ミ己ニ克ノ助ニヲイテ少ナランヤ余カ云処コ、ニ止マレリアヘテ又シタカツテコトバツクルニアラス松声竹風皆是道道ハ何ノ処ニカアル音モナク香モナシ 謹識 55

○振鷺先生戯作目録

南總館梓

振鷺亭主人著

此書ハ魏晉唐宋元明の小説及び我朝の紀事本記に載ざる愉快の傳跡を述て世に珍しき奇書とす

寒温

一 一二 草

實に文章の古雅金玉なる貴人高家の尊前に備ふ

全五冊

へき御伽艸帯なり

附いろは軒日くらしの桜花

元日より大晦日までの

いろは

編

中本一冊

如意 金時計

福来る時を前方に知る

并ニにはへ杉田にやとる梅花

宝珠 一枚摺

工風にして大福長者になるうけ合の書なり

人情箱入温石

夫人の心ハ千人が

大盤石心礎

此書の意味をのミこむ時ハ人物驚の持まへの性をかへて平生心ばんしやくのごとつばらにするにハあ

小冊

く世界の人の人情に通達する書なり

小冊

55

